

Title	福沢諭吉書簡の新資料紹介
Sub Title	
Author	丸山, 信(Maruyama, Makoto)
Publisher	三田史学会
Publication year	1983
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.3/4 (1983. 1) ,p.68(408)- 68(408)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	余白録
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19830100-0068">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19830100-0068</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

### 福沢諭吉書簡の新資料紹介

本年八月、大田区北千束在住の和田正俊氏が、福沢諭吉書簡二通所蔵される由の連絡をくだされ、その後同氏との話合で今般慶応義塾に譲渡されることになったので、それらの新資料二点をここに報告する。

(一) 小山頼三・小山完吾宛 年未詳十一月廿三日付

拝啓 今朝塾の人より承候得ば、

尊嚴御事久々御病氣の

處、御養生不被為叶遂に御長逝

の由、誠に絶言語驚入候次第、

皆々様御愁傷の段深く奉察候。

兼て御難症の事は御話にも伺居候得共

今更ら惆悵に不絶、乍憚

御家族皆々様へ御悔宜敷やう

御致意可被下候。右不取敢御弔辞

申上度勿々如此御座候。頓首。

十二月廿三日 福沢諭吉

小山頼三様 小山完吾様

(註) 封筒なし、巻紙タテ十七・八センチ、ヨコ四一・七センチ。尊嚴といつておられる父は小山謙吾のことと、明治二十九年死去していることが富田正文氏を通じて、福沢諭吉の孫娘遊喜、大山完吾夫人(太郎長女明治二十六年五月十八日生まれ、正七年十月三十日死去)の娘敦子様より御教示いたゞいた。従大

過般は御手紙被下拝見仕候。其御地は雨少なく御困りの由、併し新聞を見れば爾後信州も潤雨のよしなれば、と昨今は面目を改めたることと存候。老生共は本月初より広尾に引移り、静に

いたし居候。兼て御話の軽井沢は如何被成候哉、或は軽井沢よりも東京に御出、広尾の

宅に御同居は如何。毎朝例の通り散歩致し居り、

実は同行者の乏しきに

困り候。御都合次第御出府を待候。右延引ながら御返詞

旁申上候。勿々頓首。

三十一年 四月六日 諭吉

小山完吾様

(註) 封筒なし、巻紙タテ十七・六センチ、ヨコ六四・八センチ。本書簡は、前者と同様小山完吾宛のもので、内容は石河幹洋著『福沢諭吉伝』第四巻所収の「散歩挿話」と関連する面白いもので、完吾は明治二十六年九月入社、長野県北佐久郡小諸町二二四番地出身と「慶應義塾入社帳」(第二十六巻一九七丁)に記入されている。

なお、本書簡の入手経路など和田正俊氏から承りましたところ、前の所有者は北海タイムス東京支社長西美蔵氏で、西氏と和田正俊氏の尊父喜次郎氏とは大崎の軍需工場時代の友人で、大平洋戦争が激烈化した昭和二十年五月西氏は郷里十津川に帰郷された折、現在の和田正俊氏の住居として尊父が住居および付属品一切を含めて購入された。その折、額入りの犬養毅の遺墨などがあつたことは知っていたが、この二通の書簡については一切知らないがかつたが、最近、身辺の整理をすると「諭吉」と「福沢諭吉」との名入りの書簡がでてきたので、慶應義塾に連絡したわけである。「収まるところに収まつた」と喜んでおられた。

和田正俊氏は現在立教大学名誉教授、昭和三年宇野哲人門下として東京大学中国哲学科を卒業、現役時代は立教大学で「東洋倫理学」を講ぜられ、主論文に「西郷隆盛と庄内藩との関係」などあつた。そのなかで、西郷と福沢諭吉との関係についても論じている。(参考)叢書・日本の思想家48「吉田松陰西郷南州」明徳出版(丸山信)